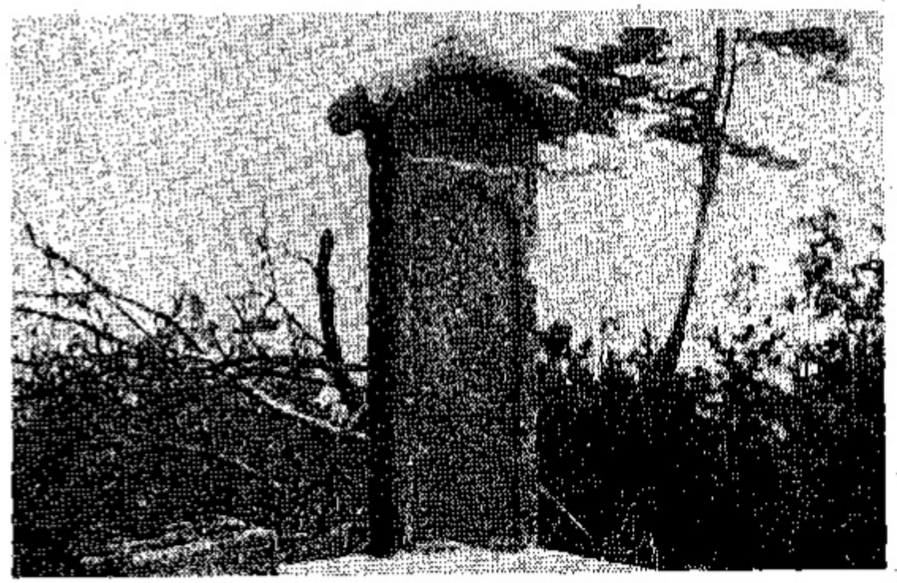
今の石名坂を登りつめた所、昔の顚野（いばいの）に、申松塚の標柱が建っている。ここから石名坂を下るように段々下って行くと右の山の中に、大きな土盛がある。ここに古い道跡が通っている。それを更に下って行くとまた大きな土盛があって、その上に石碑が建っている。これが石名坂の日蓮の宝塔である。台石の上に建った宝塔は笠ともに総丈一六五糎、巾三六糎、厚さ一九糎あって、基部の径一一米高さ二米位の半球型の土盛の上に建っている。正面中央には、南無妙法蓮華経日蓮大菩薩と一行に刻ってあり、その向って右側には、奉読誦大乗妙典部□□とかすかに読まれ、左側には、願主□□□□と風化甚しくて難読である。そして右の側面には、元禄十五年（一七〇二）壬午八月十三日、と同左の側面には、羽州苅和野本善寺十一世日信上人、と読まれる。



石名坂日蓮宝塔

これまでこの宝塔は、二箇の角石を二つ寄せ合わせた台石の上に建てられていたので、宝塔の重みで二つの台石が少しでも、ずれると、宝塔がすぐ倒れるので、そのはずみに笠が遠く転げていたりしたので、誰言うとなしに、戊辰の役に首をうたれた人の石碑だので首の笠がころげ落ちて立って居ないなどと言われたものである。

ところでこの宝塔には、このような語り伝えがある。勿論元禄の頃の話であるが、刈和野の、武藤長右衛門は篤信の日蓮信者で、本善寺開創以来壇家の主座である、この家に春も漸く深まり、おそ桜の花も風なきにチラチラ散りはじめるという日に、一人の『千箇寺さん』が泊った。旅のやつれで年のころもさだかでないが、どこか人品のいやしからぬ五十がらみの男であった。家人のねんごろなもてなしで、さもゆっくりした様子であるがしかし、どこか病気のようである。それでも翌朝になると、朝きよめをして立派にお題目をあげておつとめをし、やがて家人に語るには、御迷惑でもなんとかしばらく逗留させて貰いたい。俺の命は案外短いかも知れない。それで、もしもの事があったら、なんとかこの金で始末をして貰いたいといって、そこばくの金を出したそうだ。かくて両三日するうちに、彼の男は急に重病となって、お題目を唱える声の消えるとともに住生してしまった。

そこで武藤家では、かねて言い置もあり、よるべなき彼をことの外不憫に思い、鄭重にとむらいもすませ、その上菩提のためにと、この宝塔を建てたということである。

又この塚には、一字一石の石経も納められているという伝えもあるが、さだかではない。

ここは刈和野の村はずれで而も小高い丘になっているので、眺望もよし更には、すぐ南の斜面を数歩下れば、明水が湧いていて、往来の人の渇をうるおしたのである。

今この土盛の上には山桜二株、よく繁っていて春毎に爛漫と花を咲かせているが、花を見る人はもとより、宝塔を知る人も参詣する人も稀になっている。

因に数年前、宝塔が倒れないようにと縁者の人達によって、コンクリートで堅められている。

（嵯峨）